大学新入試は何を目指すのか

大学入試センター試験に代わって２０２０年度に実施する「大学入学共通テスト」の原案を文部科学省が公表した。知識に加え、思考力、判断力、表現力の評価を重視する改革という。新テストの目的と期待される効果を丁寧に説明し関係者の不安を払拭すべきだ。

国語に最大１２０字の記述式問題を課し、英語では実用英語技能検定（英検）やTOEICなどの民間試験を活用して「書く」「話す」の技能も評価するのが柱。国語の記述問題と英語の民間試験は得点ではなく段階別で評価する。

だが、他科目は数学を除き概ねマーク式問題で、１点刻みで受験生をふるいにかける。相対評価という幹に、大まかな到達度評価という枝を接ぎ木したような構造だ。このため、選抜試験としての制度を疑問視する大学関係者もいる。既に個別２次試験で受験生の思考力を問う記述式問題を導入している有力国立大学が、新テストの国語の記述問題を利用しないといった事態も想定される。

新テストの機能はセンター試験と何処が違うのか。肝心の点が曖昧だ。受験生を選抜する従来のセンター試験の性格を重視するのか、高校の教育課程の達成度を測る資格試験的な役割を持たせようとする改革の第一歩なのか。将来の方向性を明示する責任がある。

そもそも新テストは、高校と大学教育を円滑に接続させるため、（１）１点刻みで合否を判断するセンター試験一発勝負から複数受験が可能な到達度評価に転換する（２）各大学が記述式問題を含む個別２次試験で丁寧に学力を判断する――という構想から出発した。

文化省は２４年度以降、新テストの複数回実施や、地理歴史・公民や理科にも記述式を導入することを検討する。相対評価の性格を薄め、漸進的に到達度評価への移行を目指す方向とみられる。知りたいのは、それをどのような手段と時間軸で実現するかだ。

関係者の理解を得るためにも文化省は、新テストが目指す改革の工程表を早急に示すべきだ。